



神は小さきところに宿る

鍛冶 智也

卒業論文の指導の際に学生に対して、普遍的な真実というものは、天下国家を語ったり、壮大なテーマのもとに高邁な理想を示したりする時に明らかになるのではなくて、むしろ固有の特殊事情があって些細な事実の意味を探究する際にひっそりと浮かび上がってくるものであることを伝えたい時に、表題の言葉をよく使います。

事例研究をする際にも、想定外の実事がわかったり、期待した結果が得られなかったりした時は、途方に暮れるのではなくむしろ喜ぶべきで、細部の矛盾や直面する不合理の複雑に絡まった糸を解きほぐしていく過程で、本来解明すべき課題の全体像が明らかになる場合が経験的に多いので、「神は小さきところに宿る」と学生に呪文のように唱えることがあります。そして、思い込みが強かったり、目が曇っていたりすると、ひっそりと佇んでいる神に出会うことができなないので、批判的精神と内省と併せもった「知的誠実さ」を常に心掛けなさい、などと訓示を垂れるわけです。

大学という高等教育研究機関は、真善美を追究し、人間の根源的な課題に応え、正義を希求して学問に切磋琢磨し、その成果を次世代に引き継ぐことが使命であります。しかしながら、この課題は遠大であり、普遍的であるだけに、しばしば「小さきところ」を見過ごされてしま

いがちでもあります。明治学院大学がキャンパスを白金と戸塚におくことになったのは、「必然と偶然」の所産ですが、校地の地域性と大学の研究・教育活動は、これまで密接に連携されてきたとは言えません。むしろ、矮小なものとして、大学の掲げる遠大かつ普遍的な課題の陰に隠れてきたといっても過言ではなく、「灯台もと暗し」の典型例かもしれません。

大学にとっての「隣人」である地域社会は、どのような歴史と郷土性をもち、どのような課題を抱えているのか。大学は、そうした課題にどのように対応し、問題解決に取り組むことができるのか、そして地域社会が大学の研究と教育にどのような支援ができるのか。大学と地域社会の相互貢献の問題、「地域を学び・地域で学び・地域と学ぶ」という試みと営みは、今日、光が射し始めた「小さきところ」のように思えます。

私は都市行政・地方自治が専門なので、市政の専門家を自認しております。最近、その大学の市政の専門家が地域の市井の専門家と協働して、大学や文部科学省に新しい教育プログラムを提案したり、地域の諸課題を地道に調査したり、国土交通省と協力して「地域ルールに基づく新しい権利を構築することでまちづくりに生かす」法案を策定したり、ゼミ生と一緒に港区に政策提言をしたり、学生ボランティア団体と一緒に社会活動を行ったり、地域有志と共に地域活性化のイベントを企画したり安全のためのパトロールをしたり、地域で社会福祉施設やNPOを経営・運営したりと、「地域との関係」を目下模索しているところです。市政と市井の専門家は、果たして小さきところに宿った神に出会うことができるのでしょうか？

(かじ ともや 所員・法学部教授)